

『大鳥紀行 一氏家正綱 明治13年』読み下し文

大鳥紀行序

浄閑正綱大鳥に遊ぶ。息男直綱、猶子（ゆうし）胤保 その帰来を待受て、此行の終始とを訊ふ。答ふるに詳細を持ってす。輩言ふ。同くは紀行を綴り其中の勝景に至ては図画を副えて見せ給えと請ひけるにぞ。辞せずして為に一篇を作り、以て是に答ふる處也。

庚辰八月

大鳥紀行

当國東田川郡の南隅にある所の大鳥の池と申すは、たやすく人の至り見ぬ界なれば、そこに遊びて見果さんと同志を募り、各糧料を用意し明治十三年庚辰七月十四日午前八時を期してここを發す。其人員は池田野右衛門、工藤良右衛門、高寺なる渡部千明、神花の上野藤右衛門、工藤が従者勘藏合せて六員、東大鳥を差して登る程に、午後七時過る頃にここには至り着ぬ。

かねて郡の書記なりし長澤氏は彼所の村民等に渴仰を得し謂（おも）れける人にし、何れは彼人より一翰（いっかん）を乞請てここなる首立と云ふ。半三郎・甚十郎は申すに、就て今晚一泊の宿を頼み、次に明日池に参候たく、案内の人を取斗らい給度と懇に申入れ、猶書中に申込らるべき筈と書翰を差し出しぬ。

暫くして半三郎なるものの申出候は、荒沢と申すに神官の何某と申すのは、夫に就て御登りあらんには村方に於て兎や角申す者も候はば、さるをここにて御案内のものを取斗候事は前々村方の申合せも候て寸切と迷惑仕る儀に候。方々様直様御頼有之、召連らるべくもや候と余儀なき体に答ふ。

何等のために迷惑の筋候。そつと尋るに人有りて池に遊び、乃至（ないし）廣狭深淺を測量しなどする事は、もっぱら神の忌み嫌わせ給所にして、忽（たちまち）に風雨を起し、水を増す。夫（それ）がために此辺りの田畝近年某（それがし）にしても、幾千刈の地を失いしなど種々謂れなき妄想と訴えるも、傍らおかしけれと荒沢と申すも今は程遠し。如何せん固陋（ころう）の鴻業にあらがふべくもあらざれば、さばかりの災害を醸すべき端とあらば、池の遊びは臥して思い止りなん。責めては今晚一泊止ると云うに、輩等も心落居て御覽候させ候如く、養蚕の砌にてかなり見苦敷候へども、御不肖候。八人には御泊の条は暑き御事に候と領掌す。此対談の中、工藤は自然聲を励ましたるもおかし。望し輩等申て云く。明日は鱒狩を催し御慰に入るべく候。御逗留有て御遊び候へと申す。猶夜に入て半三郎、浄閑に申様、あなたは西田川郡長殿の御親父と承りぬ。此わたりの樵夫等は其御役所の庇護を荷う事、

近年少からず。され首立の者共江貴老の邂逅を告知にせしに、果して輩等申やういしても、示し申されたり。さらば明日は川狩して其方々を慰め奉らん。○へて御逗留を仰かるべしと申出候。旁御逗留あるべしと申たりける。

抑此田澤山中の村々には旧家の名跡多き事は普く人の知る所也。此半三郎は工藤と称し、左衛門尉祐経の次男の家と語る。良右衛門即此支流と聞きれば、伝来の古器も候はば、拝覧を許されと乞れるにぞ。高き神棚より少き箱をとりおろし、煤(すす)を払い蓋を披ひて其周り八寸斗なる陶器一つを取出し、是なん先祖祐経の右大将家より賜ふ所の神酒壺と云伝ふ。一对の内一つは嫡流の伊藤家に伝ふ日向小肥の其一つにして家に伝へし所也と語りける。備前焼の如き紫黒の陶器にてありし。口は欠損して全体を見へざりき。甚十郎は三浦と称する也。明る日は15日朝より酒よ筵よと人々奔走候ぬ。案内に連れて、即池の下流大鳥川を遡ること十二三丁にして其場所○は至りぬ。川一方を半ばせき塞ひて水勢を抽き大勢して岩隠れの鱒を狩出し、投網して獲る所也。鮭の如き大きなるを獲たりける。その弁当を開きし所は、南岸に突出し聳えたる立岩あり。それに敷わたしたる如き平らに大きなる岩あり。台座岩と云ふ。衝き落る清流前面をおし廻し岩越す。水は紋を結び渦を巻き、左右は森々樹木生ひしげり、日光を覆ひたれば、風冷かにして七月の天(そら)猶寒きが如し。或いは此程の汗におし浸したる衣共を、流れに晒らし、または水に浴しなど、各放散を謁(まみえ)し。今晚は甚十郎か許に宿りぬ。半三郎も来りて、それこれともてなしぬ。池までの里数を問ふに大凡五里と云。是より弍里斗まではすべての道方あり。瀧ありて不動を安置す。

面白き界なれば、明日は御覧あるべしと勧む。夫より上みは定りたる道もあらで、此川をひたと南北にはねわたり、風雨候ては殊更に途方を失ひ、水嵩まして、いよいよ人行を絶つと期して渉る程に時間の費(ついえ)を重る。時はやがて九里をも行へしとの心より、古来九里と唱ふと答へたり。ここより見ゆる池の台なる前山にて、いまだ積雪残りて見ゆ。山深きを推し知るべし。

晩来議して云く、今回の宿志は一層人智の開明に注がざれば、遂る事疑がるべし。然りと云へども、今日は斗らざる興を渴したり。

明日は来りし道を再び帰らんも興あらじ。しかしここより西南の一山を越して、たやすく人の通わぬ界を経回せんも一興たらずや。関川へ出んに何程の事もあるまじ。如何にと申せしに、此議最興ありと同せしかば、さらば廻て山中乃行程嶮易を尋るに、岩船郡雷村までは四里半と云ならわしぬ。申て云く其南にあたる山熊俣と云ふ尊き観音おわします堀丹後守り直寄の護持仏胎を申すかと、此わたりよりも女童への参拝せしきへ日の中に帰り来ると云ふ。然らば廻りて明日雷までの案内を頼みたり。

銀燭台をかえてジンを配賦すと云へども蚊帳は會てはる事なく大にありさまを異にする様也。而（しか）して工藤は一首の和歌を詠じて以て今日の立巖の興を援（ひ）く。翁も臥しながら二連を和して

六人で押へつめたる大鳥を 羽ばたき強くとりはつしけり
と崑多八の風を起しけるこそ。一座一笑を発したり。

明る日は（十六日）案内を先に立て、西大鳥なる角間平と云うに至る。（平をタイと唱ふるはこの方言なり）。東に隣なるをブナ平と云う。両村の田壤暗に思うには、此界限には一等の平面にて、さ辺ける角間の村外れに小さな櫓をしつらい、毛羽いまだ成らざる鷺の雛を、照るに照たる日に晒らし飼置たり。餌には蛇を与ふとなり。山郷の有様を思うべし。此角間の村外れより直に山にかかるに、幽かなる樵夫の細道鼻突きに思い設けぬ。険阻を攀（よじ）登る事数丁、汗にひたり漸くにして絶頂に至り息を継ぐ。顧れば東に月山、八苦和の峰々を遠望し、向ふ三方は山に包まれて見る影もあらず。是より下る事数丁にして道二股となる。北なるを一ノ股越と申て雷に出、南なるを二ノ股越と申て山熊俣に出る。

此道最険難也と云う。また日、角間平の川に源をたどる時は、東西二股となるその西なるは、潤水（かんすい）を合して一流となり、東なるは三面山の幽谷より流れ出ると云。総て此辺りなり。三面にとて申所の談話多かり。山深き界たるを思ふべし。抑此三面と申所は、岩船置賜村山さん郡に面せしよりの名称に出て極りたる辺境なるに、往昔小池大納言と云し、雲上のここに潜伏せし以降、星霜大凡六百余年数十代此深山に連綿して小池大炊助と申し今に此處の首長と総ると云ふ。越後摘誌と云書にも、此事見へたり。是よりまた下る事数丁にして、清涼たる潤溪に入る。ここを過て少しく山間の耕地あり。ここに二三の稼穡小屋あり。ブナ角間の二村より、今日越し来りし険阻を経て遥（ゆれ）ることここに耕作せし所と云。僻邑（そん）の困難思ひやられてあわれを催したりける。

ここを過ぎ今は層嶺四境を擁し、日光も疎（うと）き幽谷の潤水を溯る。即角間平川の上流也。登るに随（したがっ）て嶺聳へ巖高く風致最静肅たり。また所々に此潤流をせき留る設（せ）きあり。兩岸より巨材を連接して、是に杭を建並て一堤を為し、彼八尺木と云なるをここにきり溜め、時を待ちて一時の是を流下せしむるの機（からくり）なり。そばかりの大仕掛を手軽く引はずす趣向最奇巧なりと云ふなり。

此溪潤を溯る中に、二つの瀑布あり。黒滝と云始なるを一ノ滝と申て二丈ばかり、是より二三丁を隔て奥なるを二ノ滝と云也。これは二段にして最風致あり。此二つの瀧の光景さながら仙洞にあるかと疑われ、殆ど対幅の画相對するが如し。此瀧の辺り攀登る事最峻嶮にして容易すからず。山中第一の峻難なり。また此辺りに限りて見慣ぬ奇岩あり。其質純白にして大なるは二抱にも及べく水垢にさびて苔滑らかに生茂り、蔦かつら這纏（はいまと）いたる

さま実に得も云われず。

いよいよ険阻を攀登る事数丁にして、今はいつしか乾沢となり、道形も絶ぬれば、辛ふじて絶頂に這登りぬ。汗を拭いて西望すれば、ここよりは漸(ようや)く青海白帆を見る事を得、南は佐渡より西にまわりて粟生島、眼下に念珠の弁天島等見はらしたり。此峰は南より北に亘れる嶺続きにして、今登り来りしは、東面の深林なれど、西に向ふ嶺は喬樹は少なく、大方は柴原の嶺伝ひにて、絶嶮の道は少なかりし。先導の曰、これより嶺伝ひに下る時は紛ふべき道もなし。日も傾きぬ。是より暇給わらんとして帰り去ぬ。

藪に漁(あさり)て嶺を下る事数丁にして遂には雷と云ふ下り入ぬ。戸数ここなる川は大川谷に落合と云へり。山中には希な大厦(か)あり。木村屋と見ゆ。ここに息ひて汗を引かせ、其より拾八丁なる一小山を経て関川に入る。此峠に大樹の老杉有て、ここに新潟・山形両県の界標を建らる。数丁を下りて七時過る頃に関川に至り、知音なる五十嵐鶴吉が許に至りここに宿を占たり。待設たらんやうに今居風呂も湧(わか)したりとて直様(すぐさま)浴して汗を引かせたり。

今日下山の嶺より北に聳えたる摩耶山を觀望せしに、宜候に、此辺りに傑出せし所の峻峯也。猶一函を出せり。明る日十七日、関川を発し越沢の野尻が許に立寄り、木ノ俣を経て小国に至り、池田が知音なる七左衛門と云ふに息小名にし負ふ。誕生名に汗を引かせ、午飯をととのへ、西に折れて山に入り、支村なる峠の山と云ふ九折(つづらおり)を越し、今日は温海の温泉に浴し候はんと榎本三十郎が許に宿りぬ。折節居合せたる浴客もあらず。明る日も十八日ここに逗留し、翌十九日ここを立出つ。今朝は山靄(もや)深く立籠めて、前なる山も見え分(わから)ず。さながら雨の如く衣裳を沾(うるお)す斗なれば、暑さを忘れたり。崎屋の山を越して、予が許に常に来通う波戸の獵師寅蔵が許に至り。ここにて蛇を二種に調味し午飯を調えたり。立出て新し橋よりは三輪の人力あれば、池田・工藤と車(はせ)つづき、暮過る頃に恙(つつが)なく人々家に帰入る。此行や出入六日を経ると云へ共、暫時の雨もあらず、翌日は池田と共に工藤が許に至り、此行の謝詞を演(のべ)、雑務を調べ、秋風を待得て、重ねて何つ地にか遊ばん。世に身の健(すこやか)なる程楽しきはあらしなど申し辞して家には帰りぬ。

明治十三年庚辰八月四日 暖計九十三度余

七十一歳 浄閑 氏家正綱詩

※○は読解不明の文字